

---

# 青玉

夕波 ちどり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青玉

### 【Nコード】

N4499W

### 【作者名】

夕波 ちどり

### 【あらすじ】

ティア・ラピス・ファレント。

優秀な魔法使いであり、その力故、幼いながらも一族の当主をとめる彼女。人々からは天才とも、化け物とも呼ばれるが、余り気にしない。

そんな彼女が唯一望むもの。それを叶えるため、彼女は今日も日々を過ごす。

## 序章

トランプのスペードのような形をしたこの島国。

この島国には3つの大きな権力が存在する。

まずは、この島国のすべてを統べる国であるトルセニア。

そして、トルセニアの国土内にありながら、同等の権力をかざす魔技術連盟・エルム。主に道具を介し、魔法を使う者たちで形成された組織だ。

さらに、この2つの権力と肩を並べる3つ目の権力。道具を介さず、直接的に魔法を使う、つまり魔力持ちの者たちの組織。4つの血族により取仕切られるシークスと呼ばれる魔術ギルドだ。4つの血族はトルセニアの東西南北、それぞれに拠点をおいている。

それぞれが領土を持ち、そこに町を開き、魔法を生業とする者たちが彼らに仕えている。

東に、ファレント。

西に、ガルディ。

南に、ホーラウス。

北に、セリアム。

その東の一族。

頂点に君臨するのは、齢僅か十六歳の少女。

ティア・ラピス・ファレント。

天才とも、化け物とも呼ばれる一人の女の子。

各一族には様々な特色がある。

北は魔物を使役する力を持ち、南は神の声をきき従い、西は精霊と言葉を交わせる。

そして、東といえば魔物の王、所謂、魔王と呼ばれるそれと人間との間に生まれた子の末裔とされていた。

その魔王の血を引く証とされるのが、赤い石。例外を除き、彼の一族のものは右手の甲に赤い石を宿し生まれてくる。その石は強い魔力を宿し、その石のお陰で彼らはシークスの中でもとりわけ強い力を持つ一族とされていた。

「まあ、今となっては本当に魔王の末裔なのかどうか、その真相はわかりません。ですが、四族の中で最も力が強い一族であることは確かですね」

教壇に立つ教師が手に持っていて本から顔をあげる。

金髪はくるくると綺麗に巻かれ、深みのあるエメラルドの瞳は見るものを捕らえて離さない。白い肌にメリハリのある体つき。学園一の美人教師と名高い、アンジェリカ・カリーリは艶やかに微笑む。彼女の笑顔に男女関係なく、生徒たちは頬を赤くし見惚れてしま

う。

ここは東の一族が治める里、コキヒ。その里の中にある唯一の教育施設であるシアン。その高等部一年生の特進クラス。

今は、歴史の授業中。アンジェリカは更に話を進める。

「私たちはその東の一族、ファレントの直轄の里に住み、恩恵を与っているのです。それに報いることができるようよく学び、励みましょっ」

そして、と彼女は続ける。

「御当主様の、ティア様のお力になれるように」

アンジェリカの視線は窓際が一番後ろの席に座る少女に注がれる。

そして、それにつられる様にクラス中の視線が少女に向けられた。

真剣に話を聞いていた少女はアンジェリカと目が合い、そして多くの視線が自分に注がれているのがわかった。しかし、特に動じることもなく、悠然とそれらを受けとめる。

黒と見間違うほどに深い鉄紺の長い髪。それと同じ色の瞳。

そして、何よりもその美しさ。アンジェリカのような、色気を感じさせる艶やかさではなく、何も穢れを知らないような、凜とした美貌。まだ幼さの抜け切っていない顔立ちではあるが、あと数年もすればそれもなくなくなるだろう。

この少女こそファレントの現代当主であるティア・ラピス・ファレント、その人であった。

先生、とティアの美しい声が教室に響く。

「どうぞ授業を続けてください」

にこりと、それは美しくティアは微笑んだ。

授業が終わり、教室を後にするアンジェリカ。

去り際に教室を見ると、騒がしい教室の中で一人ぼつんというティア。普通ならば、そこまで目立つようなことでもないかもしれない。しかし、ティアの場合は違った。只そこに存在するだけで、どうしても彼女は良くも悪くも人目を引いてしまう。

しかし、そんなことは気にせず、自分の席から窓からずっと外を見つめていた。

それだけでも、不思議と絵になる彼女。それと同時に、この教室の中で彼女はひどく浮いた存在だった。

「困ったものねえ、うちのお姫様にも」

誰に言うでもなく、アンジェリカはため息と共にそうこぼした。

そんなアンジェリカの心配などつゆ知らず、ティアは窓の外を見つめ続けていた。

ティアは授業と授業の合間の休憩時間になると、一人で過ごす。人と自分から関わっていくようなことは決してしなかった。

周りも幼くして当主になった彼女にどう接していいのか分からず敬遠していたため、自然とそうなっていったのだ。

しかし、そんな状況にティアは不満もなかったし、それでいいと思っていた。特に問題などない。

だから、何故こんなことを言われているのかティアには理解できなかった。

「もつとクラスメートと仲良くできないの？」

放課後に話があるとアンジェリカに呼ばれて、歴史学の準備室へ行くとため息混じりにそうなじられた。部屋に入るなり、いきなりだ。

ため息をつきたいのはこっちだと、ティアは心の中でばやく。

「先生、そんなことと呼んだんですか？」

暇じゃない。と口には出さないが、遠まわしにそう告げる。そして、相手の返事も聞かず、踵を返し帰ろうとするが、それは叶わなかった。

今まさに出て行こうとした部屋の扉が、『パンツ』と高い音をたて勢いよく目の前で閉じたのだ。

アンジェリカの魔法だろう。

「ティア様！ ちゃんときいて下さい。アンジェは心配して言っているんですよ？」

まともにとり合おうとしないティアにアンジェリカは声を荒げた。思わず素で話してしまう程に。

学校では教師として接するように強く言われていたので、他の生徒と分け隔てない言葉遣い、態度をとっているのだ。

「……先生？」

「いいえ、ティア様。真剣に聞いてください」

素で話しはじめたことをたしなめる様に声をかけるが、それはまるで火に油を注ぐようで。アンジェリカは怯むことなく、ティアを見つめる。

そんなアンジェリカの様子をみて、ティアは諦める。ちゃんと話さないと帰してもらえなそうだと感じたから。

事実、先程勢いよく閉じた部屋の扉が開かない。ピクリとも動かない。まだ、アンジェリカの魔法が続いているようだ。

歴史学の準備室は普段からアンジェリカが使っている部屋。当然、地の利が彼女にあるわけで。

(破れない事はないけど、学校の備品を壊しかねないし)

ティアは肩をすくめ、アンジェリカの向かいのイスに腰をかける。言いくるめて魔法を解除してもらったほうが、良いと判断したためだ。

「ねえ、アンジェ。心配してくれるのは有難いけど、本当にこれでいいと思ってるの」

「どうしていいんですか！？ 当主として、もっと里の者たちと関わるべきです。将来のためにも、信頼や忠誠を得るべきです」

熱く語り、更に言葉を続けようとするアンジェリカ。長くなりそうだなあ、と判断したティアはすっと目を細め、片手をあげアンジェリカの言葉を遮った。

その気も無い話に時間を割く気はない。

「言いたいことは分かるけど、正直そこまで手がまわらないの。今は里の体勢を立て直すことが先決」

それ以上の言葉は認めないという雰囲気、アンジェリカは何も言えなくなる。

自分の想いが伝わらなく、しかし、ティアのいうことも分かる。歯痒さから唇をかみ締める。

そんなアンジェリカの様子を見て、ティアは苦笑する。

「アンジェは本当に私のこと好きだねえ」



先程の雰囲気から一転し、柔らかな視線を向けられ、アンジェリカはぱつと表情を明るくさせる。

「勿論です！ 私の総てはティア様に捧げていますもの！」

「……ありがとう。でも、捧げるのは忠誠とかでいいかな」

「忠誠？ ふふつ、そんなものじゃあ生ぬるいですもの。それよりもつと、ねえ？」

（ねえ？ と同意を求められても困るんだけど）

熱っぽく語られ、ティアは僅かに顔を引きつらせた。気のせいで無ければ注がれる視線も妙に熱っぽい。

いつものことだが、いつも何かしらの危機感を煽られる。気のせいなのか、それともいつか慣れるのだろうか、と考えつつ、誤魔化すように、話の矛先をずらす。

「あと、そういう類のものは私個人じゃなくてファレントに捧げてくれるともつと有難いんだけどね」

「どうしてですか？ 同じようなものじゃないですか」

心底分らないという顔をする。アンジェリカにとって大差のないことでも、ティアにとっては天と地にも違うのだ。それらの所在が何処にあるかは。

「……私に何かあったとき、アンジェリカがそのまま里に仕えてくれないと困るでしょう」

「まあ、ティア様に何かなんて起こりません。そんなこと起こる前に私が守りますから！」

ティアの手をガツと両手で握り締め、瞳を輝かせる。

そんな様子のアンジェリカを暫く見つめていたティアだが、急に笑い出した。何事かと、目を瞬かせるアンジェリカ。

「アンジェは信頼を得るって言うけど、大丈夫だと思っのよ。だって、アンジェみたいに私を想ってくれる人はちゃんというもの」

ティアは立ち上がると部屋を出て行こうとするが扉の前で振り返る。

「頼りにしてるから」

アンジェリカはその笑顔に見惚れ、頬を赤く染める。

「はい！」

その言葉に、強く頷きながら返事をする。アンジェリカは涙すら零れそうな想いだった。

ティアは続ける。

「で、部屋の扉開けてもらってもいい？」

困ったように笑いながら。

アンジェリカとの話も終わり家路につこうと学校から出ると、もう日が傾き始めていた。

赤く染まりつつある里の景色。

（ああ、綺麗だな）

一族の始まりとされる魔王と人間の子は、燃える様な、鮮血の様な鮮やかな赤い髪に瞳をしていたという。それ故、その象徴色は赤色とされ、この里にも赤色を象徴させる建築物が多かった。

赤く交じり合うその風景に、いつも心奪われる。

ただ、ここは違う。

ティアは今しがた出てきた建物を振り返る。

数年前に大々的に建て替えを行った、この教育機関であるシアンは青色が多く使われている。

現代当主であるティア自身の象徴色とされる青色が。

しかし、ティアが望んでそうした訳ではない。周りの意見に押し切られる形でそうなったのだ。ティアが行った施政故の建て替えだったため、彼女の象徴色にすべきだと。

赤い夕日に美しく馴染む町並みと違い、馴染むこともできず、所在無さげに佇む青いそれ。ティアには美しくなんて、とても見えなかった。

（なんて無様なんだろう）

息苦しさを感じ、また前を向き歩き出す。

そこで、ふと妙な周りの騒がしさに気が付いた。

ティアは一瞬何事かと眉を顰めたが、すぐに思い当たることがあり、ため息をついた。

昼間感じたあの気配。

ずっと、教室から外を見て確認していたが、やっぱりそうか。と納得する。

きっと、もうすぐ屋敷の人間が慌てて自分を迎えに来るだろうと、予想し校門へと足を速める。

けたたましい馬車の音が遠くから聞こえてきた。

案の定、校門に着くとすぐに屋敷からの迎えの馬車が到着し、慌しくそれに乗せられた。

屋敷に着くと、玄関にはティアの父親であるロード・ラピス・フアレントが、落ち着かない様子でその場を行ったりきたり。ティアが帰って来た事にも気付かないようで、何事かを呟いていた。

暫く、そんな父を目で追っていたが、いつまでたつても存在に気付いてもらえそうにないので、いい加減声をかけた。

「お父様、ただいま。そんなところで何してるんですか？」

ティアの声にロードは、足をぴたりと止めた。やっと、ティアが帰ってきたことに気が付いたらしい。

きらきらと輝く色素の薄い茶髪。その髪の毛の合間からのぞく瞳は、赤色の瞳。優しく、頼りがいのある、しかも、見た目も良い。何処に出しても恥ずかしくない父親。なのだが、何せ娘のティアから見てもひくほどの子煩悩。

そんな父親の顔色が、限りなく青ざめておりティアは苦笑するしかなかった。

「……北の一族が。セリアムが、来ている」

今にも死にそうな声で、ロードは告げる。

(だと思った。まあ、そうよね。もうすぐ私の十六歳の誕生日だし) ティアは肩をすくめた。

もうじき来るだろうと、予想はしていたものの事前連絡なしで他の血族の領地に入って来るとは、随分なめた真似をしてくれる、と内心毒づく。

「ジラム様も来てるんですか？」

どうせ来ているに決まっていると思ったが、確認の為に聞いてみると、ロードは忌々しげに頷いた。

「それと、北の若者が十数人連れてこられている」

「え、そんなに？ さすがにそれは鬱陶しい」

数人は連れてきているだろうとは思っていたが、予想よりも多い人数に、さすがに驚いた。あまり、外部の人間を里に入れたくないのに、よくも無許可でその人数を連れてきたものだ、ティアは眉間に皺を寄せる。

「本当に、なめてるわねー。何考えてるんだか」

北の一族の当主。ジラム・ルド・セリアムの偉そうな、それでいて人を馬鹿にした様な顔を思い出して思わず呟く。

「あの顔、妙にイラツとくる」

「それに関しては同意する」

独り言のつもりだったし、誰のとは明言しなかったが、伝わったらしい。

「まあ、必要ない人間は早いとこ追い出しましょう」

「……追いつ返すって、彼らが何のために来たのかわかっているだろう？」

「勿論分かっていますよ。お父様」

ティアは余裕で笑ってみせるが、ロードといえばそれとは対照的に最愛の娘のことを想い、顔を苦痛に歪ませていた。

ずっと昔にも父親のこんな顔見たことがあるな、と思う。ただ、それは誰にも言えない彼女の秘密のひとつ。

（ああ、ぞくぞくしちゃう。本当に私ってどうしようもないわ。人を不幸にする才能でもあるのかしら）

自嘲気味に笑うが、そんなことを考えている場合でもない。未だ青ざめた顔をしている父にも申し訳ないが、問題は早く片付けたい。

「北の方々は客間に？」

後ろに控えていたメイドに確認をとると、ティアは着替えることもなくそのまま客間に向かった。

後ろからロードの呼ぶ声が聞こえたが、振り返らず心の中でごめんさい、とだけ謝る。ひどく心配をかけてしまっているのは分かっていた。

北の一族と東の一族は、昔から相性が悪い。犬猿の仲とでもいうべきか。

北は、魔の者を使役する。

東は、魔の者の血を引いている。

どうもそこに問題があるらしく、どちらの一族にも互いが互いを忌み嫌っている者が多いのだ。

とにかく、事あるごとに衝突をしていた。

そんな北の一族が、東の領地をわざわざ訪ねてきたのには、当然訳がある。

今から、十数年昔のこと。ティアが当主になり間もなかったとき。

ティアと北の当主ジラムはある誓約を交わした。

その誓約のために彼らは来たのだ。

客間の前まで来たティアは、扉をノックする。

覚悟など、とうの昔にしたことだ。

今更思つところなどなかった。

そして、躊躇うことなく扉を開けた。

「失礼します。お待たせして申し訳ないです」

ティアは完璧な笑顔を浮かべ、部屋の中へと足を踏み入れた。謝罪の言葉など社交辞令だ。むしろ、了承もとらずに来たことを謝罪して欲しいくらいだ。

しかし、期待とはそうは簡単に叶わない。

「ああ。無断で来たのだから、気にするな」

偉そうに上からそう言われティアは思わず顔がひきつりそうになったが、なんとか堪えた。心の中で、ひたすらに我慢、我慢、と言いつつ聞かせ、なんとか耐えた。

ティアの心の内など察していないのか、察する気もないのか。また偉そうに座っていたソファから立ち上がりこちらに歩みを向けてくる人物。

北の一族の現代当主、ジラム・ルド・セリラム。高い背に、筋肉質というわけではないが、男性らしい身体つき。そして、灰色の髪からのぞく黒い瞳は、好戦的で気の弱い人間なら目が合っただけで動けなくなってしまうそう。随分威圧的な印象を受ける男だった。

そして、部屋の中には十数人の青年たち。ティアの美しさに頬赤く染める者もいれば、化け物とも呼ばれている彼女に怯えたような表情をする者、様々な視線がティアへ注がれる。

好意も悪意も向けられるのには慣れている。ティアはそれらに今更何を思うわけでもなく、ただこんな人数に居座られては邪魔だとだけ思った。

「お久しぶりですね」

ティアのその言葉にジラムは意地悪げににやりと笑う。

「そうだな。君は最近シークスの会議にも顔を出さない。一体いつ振りか」

「あら、私みたいな若輩者が出席しても場を混乱させるだけですか



ら。政治のことは父に一任してあります」

「謙遜しなくてもいいだろ。天才とも名高い君のことだ。君が出てくれればさぞ素晴らしい会議が出来るだろうに」

「そんな私如きが意見出来る様なことなんて。皆様の足を引っ張ってしまっただけです。ジラム様のような経験豊富な方には到底適いませんもの」

お互いにお互いを口先だけで褒め合いながら。ティアの目は据わり、ジラムは見下したかのような顔でそれは楽しそうに笑っていた。そして、お互いに目は決して逸らさない。

そんな二人の異様な空気に、青年たちは居心地悪そうに俯いていた。

いつまでも埒の明かない睨み合いを無駄だと判断したジラムは、そういえば、と話し出す。

「暫く見ないうちに随分綺麗になったな。もう幾つになった？」

ジラムが何を言っているのか、理解できず、ティアは目を瞬かせる。しかし、それも一瞬。すぐにその意図を理解たからだ。

ああ、嫌味か。と。

ただ、そんなことは顔に出さない。

「ふふっ、面白い事を仰るんですね。それだけの人数連れてきていてそれはないんじゃないですか？」

嫌味には嫌味で返してみる。

「まあ、それもそうだな。十六歳の誕生日おめでとう」

まるで感情のこもってないおめでとっ、に対し、ティアも形ばかりの礼を返した。

「では本題だ」

ジラムのそれは楽しげな声。

「誓約を果たしてもらおう、お姫様」

ジラムは自分の後ろにいる北の若者たちをちらりと見る。

「君の婚約者を決めてもらおうか」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4499w/>

---

青玉

2011年11月16日03時22分発行